

アリスさんの 幽閉教室

夜の学校からの恐怖の脱出ゲーム

もくじ

プロローグ

4

迷い人一人目 ● きんだん いしんでんしん 禁断の以心伝心ゲーム --- 7

迷い人二人目 ● きょうふ おに 恐怖の鬼ごっこ ----- 57

迷い人三人目 ● のろ 呪いの人形 ----- 99

迷い人四人目 ● 招かれざる人 ----- 153

迷い人五人目 ● ニセモノのトモダチ --- 191



プロローグ

「ねえ、うわさの赤い手紙が届いたらどうする？」

放課後の教室。

黒髪をお団子に結った女の子が、数人の生徒に質問を投げかけた。

「どうするって……赤い手紙が届いたら、必ず従わないといけないんだよね」

「赤い手紙は招待状で、夜の学校に招待されちゃうんだっけ」

「夜の学校にはカギがかかっているはずなのに、手紙が届いた人だけはいれるらしいよ」

それぞれが知っているうわさ話を、次々と口にしていく。彼女たちは恐怖を隠しきれない様子で、声は震えていた。

「アリアさんから招待状をもらったら……怖い目にあって、行方不明になるって本当なのかな」

ある女の子がぼつりとつぶやくと、シンと静まりかえった。

お互いに顔を見合わせて、ごくんと喉を鳴らす。

この学校の生徒なら、誰でも知っているアリアさんの話。

まっすぐに伸びた銀色の長い髪。

黒色のワンピースを着ているらしい。

アリアさんは遊び相手を探していて、気まぐれに赤い手紙を送るそうだ。

受け取った人は、いつの間にかこの学校から消えているんだって。

このうわさ話の真相は誰にもわからない。

だけど……

「そういえば隣のクラスの紗奈ちゃん、最近学校に来てないよね」

「ま、まさか……」

そう聞いた女の子たちは、おびえた表情になる。

アリアさんの話はうわさでしかない。

実在するのかもしれないのか。

悪い幽霊なのか、そうではないのか。

真実は誰も知らない。

ただわかってしていることは……

この学校では行方不明者があとを絶たない——ということだけ。
これは、そんなアリアさんにまつわる奇妙なお話。



迷い人一人目 禁断の以心伝心ゲーム

「え、なにか入ってる……」

私、一ノ瀬杏樹は、ごく普通の中学二年生。

五時間目の授業が終わった放課後。学校から帰ろうと、昇降口で下駄箱の扉に手をかけたときだった。

ゆっくり扉を開けると、あるはずのないものが入っていた。

「……これ、なんだろう」

それは見慣れない赤い封筒だった。おそろおそろ手に取ってみる。

これは手紙？ 誰からだろう。

送り主の名前を探して、封筒のあちこちを見ていく。

「……名前が書いてない」

裏まで確認したけど、どこにも見当たらない。

不思議に思っていると、私はあることが頭に浮かんでハツとする。

もしかして、これって……

「どうしたの？」

背後から声がして、驚いて肩がびくつとした。

くると振り返ると、同じクラスの奈央ちゃんだった。

奈央ちゃんは首をかしげながら、ぐいつと近づいて私の顔をのぞきこんできた。

私はあわてて持っていた封筒を背中に隠す。

「な、なんでもないよっ」

「……ふーん」

一瞬不思議そうにしたけど、奈央ちゃんはそのまま靴をはいて外に出ていった。

よかつた。なんとかごまかせたみたい。

まだ心臓がドキドキと音を立てている。

あわててこの手紙を隠したのは、理由がある……

それは、この手紙の存在を言っではいけないと思ったからなんだ。

赤い封筒を見て思い出した。

この学校で有名なあるうわさを――

『赤い手紙は、秘密の招待状』

『赤い手紙が届いたら、決して誰にも言っではいけない』

もしもそれを守れなかったら……

アリアさんに、学校に閉じこめられてしまうんだって。

思い出したら、また心臓の音がうるさくなってきた。

この手紙が本当にアリアさんからの手紙だったとしたら、どうしよう。

不安とおそろしきで半泣き状態だ。

だって、アリアさんは恐ろしい幽霊だってうわさがある。

アリアさんから手紙が届いた人は、怖い目にあつて、行方不明になつてしまつて。

この手紙がアリアさんからのものだったとしたら……そんなの怖くて仕方がないよ。

「アリアさん」なんて、ただのうわさだと思つていた。

だけど、よく聞いていた特徴と同じ赤い手紙が、たしかに今、私の手の中にある。

一気に血の気が引いていくのが、自分でもわかつた。

……他の誰かからの手紙って可能性はないかなあ。

うん、そうだよ！ この手紙がアリアさんからだなんて、まだ決まつたわけじゃない。

まるで自分を納得させるように、そう思いなおしてみたら、少しだけ涙がひいた。

でも……この学校の生徒なら、全員がアリアさんのうわさを知っているはず。

もちろん赤い手紙のことも……

それなのに、わざわざ赤い封筒を使う子なんているのかなあ。

ぐるぐると頭の中で考えてみたけど、やつぱりこの手紙の送り主はわかりそうにない。

怖いけど、開けてみるしかないよね……

私は深く息を吸つて、手紙に向き直つた。

『この手紙を開けるときは、一人でなければいけない』

「……あつ！」

封筒を開ける寸前に、うわさで聞いたルールを思い出した。

誰かに手紙を見られたらいけないんだつた。

ルールを守るため、私は辺りをきよろきよろと見渡してみる。

校舎の外からは、楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

でも、私の近くには、人の気配はない。

よし、誰もいない。開けてみよう。

人がいないことをもう一度確認すると、封筒を持つ手に力が入った。緊張で手が震える。怖い。もう怖くて仕方がないよ。

プルプルと震える手で、なんとか封筒を開ける。すると——
中に入っていたのは、一枚の赤い便せんだった。思わず「ひっ」と声が出そうになる。不気味な便せんには、白い文字でこう書いてあった。

招待状

このたびはおめでとございます。

あなたが選ばれました。

今夜十九時。正門が開いているのが宴の合図。

あなたを夜の学校に招待します。

今宵は特別にあなたの大切な人をつれてきてね。

アリアより

読み終えた瞬間、ドクンと心臓がはねた。

そして、背筋にぞわつと寒気が走る。

そこにはたしかに、「アリア」と書かれている。

本当に、アリアさんからの招待状だったなんて……

なによりただの手紙なのに、この手紙を持っていると、気が重くなるような気がした。どうしよう。一体私はどうしたら……

私だって、アリアさんのうわさは知っていた。でも、信じていなかったんだ。

だって、招待状を送る幽霊だなんてありえないと思ったから。

行かないとだめかな……

そうだつ！

知らないふりしちやえばいいんじゃないかな。



怖い思いをするとわかって、夜の学校に行く勇氣なんてないよ！
そう思ったのだけれど、頭の中に、またうわさが浮かんできた。

『アリアさんから招待状を受け取って、その日に行かなかった人は、夢にアリアさんが出てきて……そのままソッチの世界に連れていかれちゃうんだって……！』

思い出すと同時に、背中がぞくつとする。

やつぱり、無視せず行つたほうがいいよね。

それにしても、大切な人を連れてこいだなんて。

私だけじゃなくて、その人も怖い目にあうってことなのかなあ。

それは心が痛むけれど……実は、大切な人という言葉で、すぐに思い当たる人がいた。

「星七くん……！」

私はクラスでそこそ目立つタイプだと思う。

一軍グループの中心つてわけじゃないけれど、明るいわねってよく言われるし、男子からも女子からも人気がある。

そんな私と並んでも違和感がないくらい……星七くんは特別だ。

スポーツ万能で足も速いし、クラスで一番モテる一軍男子つてやつ。

いつも友達に囲まれていて、さわやかな笑顔はまぶしいくらい！

不思議と、私と近い存在つて感じがしていたんだ。

そう思っていたのは、私の勘違いじゃなかったみたいで……一ヶ月くらい前の放課後、「付き合つてほしい」つて星七くんに告白されたの。

うれしくて胸のドキドキが止まらなかった。

私にとつて、大切な人は星七くんしか考えられない。

怖いけど、星七くんと一緒なら……！

彼のことを考えたら、さつきまで重くなっていた気持ちだが、少し軽くなったような気がした。

とにかく、星七くんに話してみよう！ あつ、でも……

星七くんに招待状のことを話そうと思つていた私は、思いとどまる。

そういえば、「アリアさんの招待状のことは誰にも言つてはいけない」つていうルールもあったんだつた。

手紙のことは、星七くんにも秘密にしないといけないつてことだと思う。

なのに、「十九時に一緒に学校に行こう」だなんて、どうやって説明すればいいかわからなかった。「どうにか学校に来てもらうしかない……よね」

私は悩んだすえ、星七くんの下駄箱に手紙を入れることにした。本当は直接お願いしたかったけど……「なんで夜の学校に？」って質問されたら、上手く答えられないと思ったんだ。

それに、星七くんの顔を見たら、つい口走ってしまうかもしれないから……

星七くんへ。

今日の十九時に学校の正面玄関に来てください。

大事な話があります。

来てくれるまで待ってます。

このことは誰にも言わないでください。

杏樹

大丈夫。星七くんなら絶対に来てくれる。

だって私の彼氏だもん！

心の中でそう思いながら、手紙をぎゅつと握る。

願いをこめて、下駄箱の中にそつと手紙を入れた。

それからあつという間に時間が過ぎて、気づけばオレンジ色の夕日は沈み、真っ黒な夜に変わっていた。

私は薄暗い道を歩いて、学校へ向かった。

こうして夜に家を出たことは、お母さんには内緒。

だって、夜に出かけるなんて知られたら、怒られちゃうから。

心細くなってきた、自然と歩くスピードが速くなる。

やつとの思いで学校に着いて、正面玄関の前にある大きな時計を確認した。

「……あつ！ 時間が！」

時計の時刻は十八時五十五分。約束の時間には間に合ったみたい。

昇降口は、横一面がガラス張りで、外からも中の様子が見えるつくりだ。
おそろおそろのぞきこんでみる。

「真っ暗でよく見えないなあ」

目を凝らしてみたけど、中が暗くて何も見えない。

毎日通っている学校のはずなのに、なんだか嫌な雰囲気^{いんき}がただよっていた。
急に怖くな^{こわ}ってきて、ドキドキと心臓の音が激しくなる。

これから起こることへの恐怖と不安と、いろんな感情で心が落ち着かない。

「……はあ」

こういうときは深呼吸をしよう。そう思つて、息を吸いこもうとしたときだった。
背後から、静かな夜には不釣りあいな声が飛んできた。

「……杏樹！ 手紙見たよ。こんな時間に呼び出して。なにかあつたのか？」
声のするほうへゆっくり振り向く。

そこにいたのは、黒髪がよく似合う男の子……星七くんだった。

息を切らしながら、私のほうへ走ってくる。

その姿を見た瞬間、胸の中にずっとあつた不安が消えていくように感じた。

星七くんは私の前まで来ると、ひざに手をついて肩で大きく息をしている。

「星七くん……！ 来てくれてありがとう」

私が声をかけると、星七くんは顔をあげた。そして、なぜだか目を丸くさせる。

「……あのさ」

「ごめんね。びつくりさせちゃつて。大丈夫だから、一緒に中に入ろう？」

なにか言おうとした星七くんの言葉をさえぎり、腕をガシツと組む。

だつて時間がなかったんだもん。ちらりと時計を見ると、時刻は十八時五十八分。
早くしないと、約束の十九時になっちゃう！

もしも時間に遅れたら、アリアさんを怒らせてしまうかもしれない。

そう考えた私は、あせて、彼の腕をぐいっとひっぱった。

「……ちよつと、待つてよ」

星七くんの顔が引きつる。

体に力が入っているのか、腕を引いてもなかなか動かない。

そつか。星七くんはアリアさんに招待されていることを知らない。

だからきつと、夜の学校に入ろうとすることに、驚いたんだと思う。

でも、今はそんなこと言っている場合じゃないんだ！

だって、早く中に入らないと……

立ち止まったまま、どうすればいいのか、迷っているときだった。

ゴーン！　ゴーン！

今まで聞いたことのない、低いチャイムの音が鳴り響く。

いつも聞いているチャイムとは違う音色だったから、驚いて体が固まる。

星七くんも驚いたようで、肩をびくつと揺らした。

奇妙な音に気を取られている間に、私は彼の腕を思いきりぐいと引つ張った。

……星七くん、ごめんね。

そう心の中で謝りながら。

どうやら力が抜けていたようで、星七くんの体は引つ張られるまま、私と一緒に学校の中にな
だれこんだ。

「……なんか、寒い」

学校の中に入った瞬間、ひやりと冷たい風が吹いた気がした。

夜の学校は暗くて静かで……不気味な雰囲気漂っている。

「なんで、こんなこと……」

星七くんは、無理やり学校の中に入れられたことが気に食わないのだろうか。

わかりやすく顔をゆがませる。

その顔を見て私はハツとする。星七くんに、ちゃんと説明しないと……

「ごめんね。実はね……」

アリアさんから招待されたことを話そうとしたときだった。

——ギギーツ！　ドン！

背中の方から、大きな金属音が聞こえた。

それは、昇降口のドアが勢いよく閉まった音だった。

私と星七くんは、思わず顔を見合わせる。

「……え」

「今、ドア閉めた？」

「いや、閉めてないよ。星七くんが閉めたんじゃないの？」

「俺じゃないよ！」

「だったら誰が……」

私たちが二人とも、ドアを閉めてないということは、ドアが勝手に閉まったということだ。そう理解した瞬間、ぞわりと嫌な予感がある。

「……っ」

考えるより先に、体が動いた。

私はあわてて、いつの間にか閉まってしまったドアへ戻り、両手でぐつと押してみる。

だけど、ピクリとも動かない。

「……あれ」

今度は力いっぱい引いてみる。しかし、びくともしない。

「開かないのか？ 代わって！」

今度は、星七くんが開けようと試してみる。

ドアを押したり引いたり、力いっぱい試しているようだった。

なのに、ドアを叩く音だけが鳴り響く。

男の子の力でもピクリとも動かないなんて……

「なんだよ。外から開かないならわかるけど、中にいるのに開かないってどういうことだ!？」

星七くんは、怒ったように声をあげた。

私たちは今、校舎の中にいる。つまり、このドアのカギは閉められていないということだ。なのに、開かないだなんて。明らかにおかしい……!

私たちは、また顔を見合わせる。この状況が普通ではないということが、わかったから。

「なあ、ここ急に寒くないか？」

星七くんは、自分の腕をさすりながら、震えているように見えた。

たしかに、学校の中に入ってから、全身がぶるつと震えるくらい寒気を感じる。

理由はわからないけど、なんだか気味が悪い。

「うん……寒気がするね」

「なんか普通じゃない感じがするし。とにかくここから出よう。他の出口を探そう」

そう言つて、星七くんは、正面玄関とは違う方向に一步踏み出した。

そのときだった……

「クスクス。だめだよ。まだ遊んでないもん」

どこからか甲高い笑い声が聞こえた。体が震えるくらい不気味な声だった。思わず叫びそうになったけど、なんとか悲鳴をのみこむ。

「だ、誰?!」

怖くて、声が裏返ってしまふ。

辺りをきよろきよろ見回したけど、誰もいない。

あれ、気のせい……?

私はほっと胸をなでおろした。だけど、また……

「クスクス」

同じ声で、含み笑いが聞こえる。

なんだかさつきより、声が近づいているような気がする。

そう思った途端、心臓がバクバクして、冷や汗がふぎだしてきた。

もう、やだ。怖いよ……

今すぐこの場所から逃げ出したかった。そんな半泣き状態の私の前に、すっと影が下りてくる。
「夜の学校によろこ。今宵は楽しく遊びましょう」

目の前に突然現れた、ぎょろりとした赤い瞳と目が合った。

「きやあああ!!」

思わず星七くんの腕にしがみつく。

さつきまで、誰もいなかったはずなのに……

そこには、私よりも、一回りほど体が小さい女の子が……いた!

初めて見るのに私はその子が誰なのか、わかってしまった。

まっすぐに伸びた銀色の髪の毛に、真っ黒のワンピース。

それは、うわさで聞いていたアリアさんの容姿と同じだった。

「クスクス……」

女の子は、いたずらっぽく笑う。

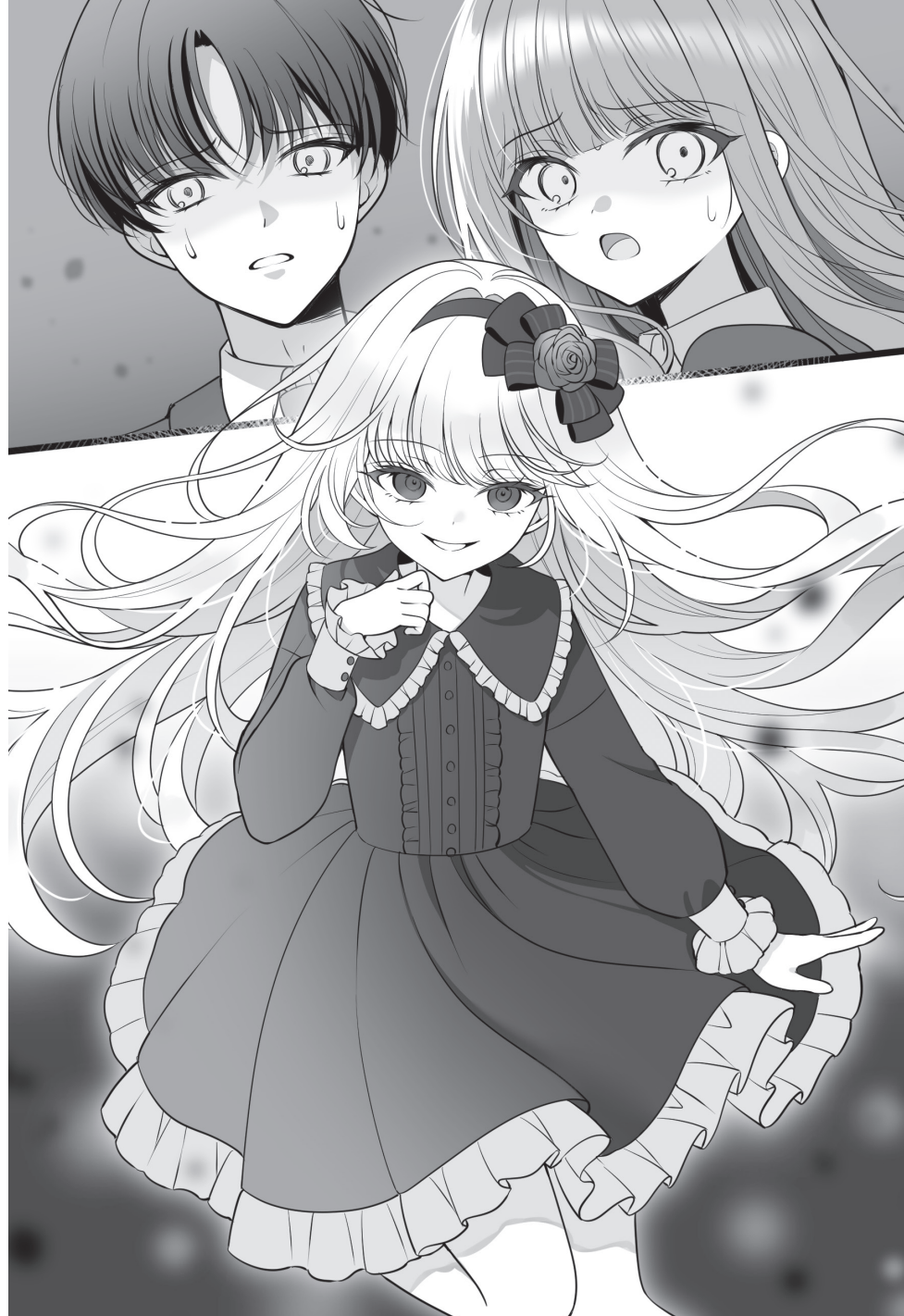
その笑顔に、私はぞつとして鳥肌が止まらない。

「ひっ!!」

思わず小さい悲鳴をあげる。

助けを求めるように、星七くんの腕をつかんでいる手に力を込めた。

「うそ、でしょ?」



私は見てしまった。アリアさんの足が地面についていないことを。信じられないけど、体が浮いてるんだ。

「……ウソだろ」

同じタイミングで星七くんも気づいたようで、青ざめて顔をしかめた。

「あ、あなたが……アリアさんなの？」

震える手をぎゅつと握り、勇気を振りしぼって聞いた。

「クスクス……」

答えの代わりに、女の子は目を細めて笑う。

私たちは顔を見合わせてうなずいた。

星七くんもぎつと、同じことを考えていると思う。

「まさか、本当に実在するなんてな」

「私も……ただのうわさだと思ってたよ」

アリアさんに関するうわさはたくさん聞いたことがある。

ただ、うわさだけで、「実際に見た」という話は聞いたことがなかった。

だけど、不思議と確信が持てた。

目の前にいる女の子は……

「……この子が、アリアさんだ!」

私がそう言うと、星七くんはまっすぐ前を向いたまま、こくりとうなずいた。アリアさんは私と星七くんを交互に見て、ニヤリと笑う。

「やっぱり、彼を連れてきたのね」

「……ん? どういう意味だろう。」

その言い方が引つかかって、考えていたら……

星七くんが、ツンと私の袖をひっぱった。

視線を星七くんに移すと、星七くんは目配せをして、耳元でひっそりと言った。

「あのさ……『せーの』でここから逃げるぞ?」

アリアさんに聞かれないように小声なのだと思う。言い終えると、星七くんは右足を一步下げ、走り出すのに準備万端な格好をしている。

星七くんに言われてハッとした。たしかに、ここから逃げたほうがいいに決まっている。

私はゆつくりとうなずく。

「よし、いくぞ……せー……」

星七くんが押し殺した声で、かけ声をかけたとき、ふいに近くに気配を感じた。なんだろう。なにか……

不思議に思いながら顔を上げると、息が止まった。

「きやああああ!!」

「逃げちゃだめだよ! まだアリアと遊んでないんだから!」

すぐ目の前に、ずいっと身を乗り出すようにしたアリアさんの顔が——!

「……っ!」

踏み出そうとしていた足が止まる。

言葉を失う私たちに、アリアさんは楽しげな声で続ける。

「今日は! せっかく二人も遊びに来てくれたから、ゲームしようよ!」

この場の雰囲気には似合わない、陽気な声が響く。

まるで、小さな子どもが楽しそうに童謡を歌っているようだった。

「ゲ、ゲーム!?!」

「じゃーん! その名も以心伝心ゲーム!! 二人ならきつと簡単でしょ? クスクス」
そう言うと、アリアさんは楽しげにくるりと回った。

「私たちが答えるってこと？」

「そうだよ。アリアがお題を出すから、二人は息を合わせて答えてね」

以心伝心ゲームとは、お題に対する答えを合わせるゲームのことだと思う。
参加者は私と星七くんだから、私たちの答えがそろえば勝ち。

「やだよ！ そんなわけのわからないゲーム……」

言い返そうとする星七くんの腕を、ぎゅつと引いた。

「星七くん、今はアリアさんに従ったほうがいいんじゃないかな」

だって反論して、アリアさんを怒らせたら、この学校から出られないかもしれない。
そう考えたなら、星七くんの腕をつかむ手が震え出した。

「まあ、たしかにそうだな……」

星七くんはうなずいた。

引きとめたのには、もう一つ理由がある。

以心伝心ゲームは、答えを合わせるゲーム。

ということは、付き合っている私たちなら、あつさりクリアできるんじゃないかな！
そう思ったんだ。

でも、隣に視線を向けると、星七くんの表情はくもっているように見える。

星七くん、どうしたんだろう。私たちなら、絶対にクリアできるのに……

「私たちが勝ったら、ここから出してくれる？」

「うんっ！ いいよお！ 勝てたらね。クスクス」

アリアさんはにんまりと笑って楽しそうだ。

「もしも……正解できなかったら？」

星七くんは不安そうに、アリアさんに質問する。

「ここから出られないよ……クスクス。永遠にね」

「……そ、そんな。どうしよう」

戸惑う私たちを見たアリアさんは、口角を上げてにたりと笑う。

その表情に、全身にぞくつと寒気が走った。

緊張がゆるんでいた私は、すぐに後悔した。

そして、思いなおした。簡単にクリアできるなんて思ったのは、間違いだつたと。
今から始まるのは、友達同士でするような楽しい以心伝心ゲームなんかじゃない。
おそろしい以心伝心ゲームだ……

夜の学校は電気がついてなくて、辺りは真っ暗。

そんな中、満月の月明かりが、ぼんやりと私たちを照らしていた。

「以心伝心ゲームってことは、お題に対して答えを合わせればいいってこと？ 私たちが知っている以心伝心ゲームでいいんだよね？」

「そうだよ！ お題に対して、ただお互いの答えを合わせればいいだけ。クスクス……簡単でしょ？」

よかったあ！ やっぱ私の思っていた以心伝心ゲームだった。
そんなの楽勝じゃん。

簡単にゲームに勝てそうだとわかり、私はほつとする。

「あなたたちにとっては、簡単なはずだね。クスクス……」

アリアさんは私と星七くんを交互に見て、体を揺らしながら笑う。
まるで、楽しんでいるかのようだった。

「ルールはそうだなあ。アリアが十個質問する。五問正解できたらここから出してあげる！」
「え、それだけでいいの!？」

正直、拍子抜けしてしまった。

だって十問中、半分のたった五問だけ正解すればいいだなんて。

付き合っている私たちには、簡単すぎると思っただ。

これなら、アリアさんのゲームに勝てる。夜の学校から抜け出せる！

自信がみなぎってきて、にこりと笑って隣に視線を向ける。

だけど、星七くんは、全く違う表情をしていた。

「星七くん、私たちならこのゲームに勝てるよ！」

私は星七くんを安心させようと、グツと握りこぶしを作って、できるだけ元気よく言ってみた。
「……」

でも、星七くんの表情はくもったままだ。

やっぱ不安なのかなあ。

突然こんな状況になって、混乱するのは仕方がないよね。

私は、星七くんを巻きこんでしまったことを思い、心がずきんと痛んだ。

「星七くん……あのね」

話しかけようとする……

——ゴーン！　ゴーン！

まただ。いつもとは雰囲氣が違（ちが）うチャイムの音が鳴（ひび）り響く。

「あつ、もうゲームが始まったから、余計な会話は禁止だよ！　ヒントになっちゃうからね」
どうやらこの嫌（いや）な音色（ねいろ）のチャイムが、ゲーム開始の合図（いふ）だったみたい。

アリアさんの言葉に、私は口にしかけた言葉をのみこんだ。

じつと見つめるけど、星七くんはうつむいたままだった。

星七くん……

話したいことはたくさんあるのに。

私のせいで、ごめんね。

このゲームに勝てたら、いっぱい謝（あやま）ろう……！

星七くんと話せなくて不安だけど、気合を入れるようにグツと握（にぎ）り拳（こぶし）を作った。

そして、上を向いてアリアさんをにらみつける。

「私たちは……大丈夫！」

そんな私をアリアさんは、見下したようにあざ笑った。

それから、空中でくると回ると、にこつと笑ってお題を出しはじめる。

「じゃじゃん！　第一問、二人が初めて出会った場所は？」

この場の雰囲氣（ふんいき）に合わないほど、アリアさんは陽気だった。

出された問題について考える。なーんだ！　こんな簡単だ。

私と星七くんは中学生から同じ学校になった……ということとは、初めて会ったのは、学校ってこと。

星七くんもわかったようで、私たちはすぐに顔を見合わせる。

そして、お互（たが）いにゆつくりうなずく。

「あれ？　考える時間はいらなのかな？」

顔をかたむけて尋（たず）ねるアリアさんに、私は意気揚々（いきようよう）と言い放つ。

「うん、知らない！　こんな問題、簡単だもん」

大丈夫。絶対に二人の答えはそうはず！

「では、アリアが『せーの』って言ったら同時に答えてね？　せーの！」

アリアさんのかけ声を合図に、私は大きく息を吸った。

そして、頭の中に浮かんでいた答えを叫んだ。

「学校」

「学校」

星七くんと、声が重なる。

よかった！ 同じ答えだ。

星七くんと同じ答えだったことがうれしくて、私は両手を上げた。
「やった！」

だけどアリアさんは首をかしげて、不服そうな顔をしている。
どうして？ 答えがそろったのに……

「ちよつと答えの範囲が広すぎない？」

アリアさんは、頬をぷくつと膨らませている。

まるで、不満がある子どもみたいだ。

言われてみれば、たしかにその通りで、答えの範囲として広いかもしれない。
アリアさんの反応に、どくと心臓がはねた。

無言のままのアリアさん。これは不正解ってことだろうか……

緊張からか額に汗がにじんできた。アリアさんをじつと見つめていると――

次の瞬間、くしやりと笑った。

「まっ、最初の問題だから許してあげる」

私はホッとして肩の力が抜けた。

よかった！ この調子なら、すぐに五問正解できそうだ。

そのあとも、アリアさんの軽快な声とともに問題は続いていく。

「じゃじゃん！ 第二問。星七くんの好きな食べ物は何？」

この問題の答えもすぐにわかった。私は自然と笑顔になる。

星七くんの好きなものなんて、知ってるに決まっている。

だって、私は彼女だよ？

「その顔は余裕みたいだね♪ セーので答えてねっ！ セーの」

「からあげっ！」

「からあげ」

二人の声が重なった。二問目も正解だ。

星七くんは、給食からあげが出るといつもこっそり喜んでるんだ。

その様子を思い出したら、かわいらしくて、ふふつとにやけてしまう。

「おお！　すごいね、すごいね！」

アリアさんは空中に浮かんだまま、子どもが喜ぶように、両手を叩いてはしゃぎだした。私は隣にいる星七くんをちらりと見つめる。

優しくて、かつこい自慢の彼氏。

星七くんと一緒に、このままアリアさんとの勝負に勝てる。

自信が出てきた私は前を向いた。

「第三問！　星七くんの家族構成、一緒に暮らしている家族の人数は？」

えっと、たしか……

すぐに思い出せなくて、必死に記憶をたどる。

おじいちゃんとおばあちゃんは、田舎で暮らしてるって言ってた。

兄弟は弟がいるって言ってたわけ。

そうだ！　思い出した。

ちよつと悩みながらも、正解を思い出して安心したときだった。

なんだか星七くんの表情がくもっているように感じた。

「星七くん！　大丈夫だよ？　私、星七くんの家族構成、ちゃんと覚えてるから」

「……お、おう」

ずっと不安そうにしている星七くんを安心させるように、にかつと笑って見せた。

「そろそろ答えにうつるよお。では、せーの！」

アリアさんのかけ声とともに、息を吸い込んだ。そして……

「家族四人！」

「四人」

正解が重なった。

やった！　また正解できた……！

自分の記憶力の高さに感謝した。

連続正解できたことがうれしくて、私はその場でピョンピョン飛びはねた。

その勢いのまま、星七くんにハイタッチを求める。

「星七くん、やったね！」

「……あ、ああ」

星七くんは、どこか上の空だった。

せっかく正解できたのに、なんだかうれしそうじゃない。それどころか、ずつとぎこちない表情をしている。

どうしたんだろう……

こんなに順調なのに、相変わらず星七くんの表情が暗くて、気になってしまう。

星七くんを見つめていると、アリアさんの含み笑いが聞こえてきた。

「クスクス。ここまでは星七くんについてのお題だったけど、次は逆にしようかなあ」

そう言つて、にたりと笑った。その表情が不気味で、血の気が引いていく。

私は自分を落ち着かせるように、胸元に手のひらを当てた。

大丈夫、星七くんは聞き上手な彼氏だ。

私に関する質問だつて、きつと答えられるよ。

不安な気持ちを隠すように、そう自分に言い聞かせた。

「では、彼女の家族構成。一緒に住んでいる人数は？」

私は一人っ子で、お父さんとお母さんと暮らしている。

つまり、「三人」が正解だ。

彼女の家族のことくらい、彼氏なら知つてて当然だよ。もちろん、星七くんは覚えてるはず！

ず！

案外簡単な質問だったので、ホッと息を吐いた。

だけど……

「三人！」

「よ、四人……」

「ブブー！ 不正解!!」

アリアさんは陽気な声で言いながら、両手でバツ印のポーズをする。

——星七くんの答えとそろわなかった。

間違われると思っていなかった私は、一瞬きよとした。

「ご、ごめん」

「クスクス。不正解だったねえ」

アリアさんは、星七くんが間違えたのがおかしいのか、ケタケタ笑っていた。

簡単な問題だから、大丈夫だと思つていただけ。

星七くんが、こんな答えられて当然の問題を間違えるなんて……ちよつとだけ問い詰めたい気持ちになった。

だけど、申し訳なさそうに顔を背けるので、なんにも言えなくなってしまう。

「だ、大丈夫だよ！ まだ四問目だよ？」

私は励ますように、無理して明るい声で言った。

笑顔の仮面を張り付けたけど、心の中には動揺が広がる。

……星七くんなら、簡単に正解できる問題だと思ったのになあ。

そんな私の様子を見て、アリアさんはくすつと笑う。

「クスクス。残念だったねえ。じゃあ、第五問！ 彼女の好きな食べ物は何？」

また簡単な問題だ！

安心からか、緊張がゆるむ。

だってさ、彼女の好きな食べ物を知らない彼氏なんて、いるのかな？

得意顔でアリアさんを見つめた。

「これは絶対に正解できるよ！ 知ってて当然だもん」

大丈夫。星七くんが私の好きな食べ物を知らないわけなんてないもん。

そう思っていたのに……

「いちご！」

「ハンバーグ……」

またそろわなかった。がっかりして体の力が抜けそうになる。

なんで？ どうして？

そんな言葉が頭の中をぐるぐる回っている。

「ブブー！ クスクス……。またそろわなかったね。どうしたのかな？」

アリアさんはうれしそうに両足をバタバタとゆらした。

「ごめん……！ 俺……」

「だ、大丈夫！ 間違いないで誰にでもあるよ。気にしないで」

星七くんの額に、汗が伝っているのが見えた。

そっか。この状況に緊張してるのかもしれない。

だから、そろわなくても責めちゃだめだね。

そう自分を納得させようとしたんだけど……

なんだか、嫌な予感がする。

わからない。わからないけど……

星七くんの表情や、簡単な問題に答えられないことに、違和感を覚えた。

そのあとも、なぜか星七くと答えがそろわなかった。

おかしい、絶対におかしいんだ。

今まで我慢してたけど、さすがにムツとしてしまう。気づけば叫んでしまっていた。

「なんで……答えられないの!? ちゃんと答えないと、ここから出られなくなっちゃうかもしれないんだよ!」

我慢していた怒りの言葉が口から飛び出した。無意識に強い口調になってしまった。

「……ごめん」

星七くんは、ただ謝るだけ。

言い訳すらしてくれない。

違和感がつのつて、思わず星七くんを責めてしまった。罪悪感が胸に広がっていく。でも……星七くんの考えてることがわからない。

私はこんなにも必死なのに、どうして簡単な質問でさえ答えられないの？

彼氏の星七くんなら、知ってるはずなのに。

芽生えた違和感はどう膨らんでいく——

そのあとも……

「ぶつぶー! 不正解。またそろわなかったねー!」

また外れた。

なんで、どうして——

空気がピリツと張り詰める。ここである疑惑が思い浮かんだ。

もしかして、星七くんはわざと外している？

私はぎゅつと手に力を込めた。そして、芽生えた違和感を星七くんにつける。

「ねえ、星七くん。もしかして……わざと外してる?」

こんなこと、本当は聞きたくないかった。

だけど、このままだと、私たちはゲームに負けてしまうから。勇気を振りしぼって、質問をした。

こんなに簡単な質問なのに、答えられないなんて、なにかがおかしい。けれど、星七くんは口を開かず、顔もうつむいたままだった。

返事を聞くのが怖くて、心臓の音はげしくなる。

「……わざとじゃないよ」

星七くんは、うつむいたまま力なくつぶやいた。
わざとじゃない？

だったら、どうして間違えるんだろう。
ますますわけがわからなかった。

「だったら、こんなに簡単な問題なのに……！ どうして答えられないの？」

私は歯がゆくて、ぎゅつと唇を噛んだ。

こんな状況でケンカをしたいわけじゃない。

だけど、怒らずにはいられなかった。

星七くんは、そんな私をじつとみつめる。

「……わかるわけないだろ」

今度は困ったように苦笑いをして、ぼそりとつぶやいた。

「え？」

「わかるわけないだろ！ って言ったんだよ」

こんなに声を荒らげた星七くんは、初めてだった。

なんだか、かなりいらだっている様子に見える。

「なっ、なんで？ 彼女にかんすることくらい、答えられるでしょ？ それに、簡単な問題だよ？」

「俺はお前のことなんて、ほとんど知らないんだから、答えられるわけないんだよ」

「な、なに言ってるの？ 星七くん……？」

一体どうしたの？ いつもの優しい星七くんじゃない。

態度を急変させた星七くんに、私は戸惑う。

「せ、星七くんは彼氏なんだから、こんな簡単な問題……」

おろおろしながら、私は続ける。

ねえ星七くん、どうしたっていうの。

ちらりと星七くんを見ると、ひゅつと胸の辺りが冷えた。

今まで見たことのないような冷たい瞳で、私を見ていたんだ。

「彼氏じゃない……俺はお前の彼氏じゃない!!」

なにもかも否定するような冷たい声に、一気に空気がヒリついた。

星七くんの言葉の意味が理解できない。

「な、なに言ってるの？」

声が震える。だって、意味がわからないよ。
「お前の方こそ、ずっとなにを言ってるんだよ。俺が付き合ってるのは杏樹だ!」

「そうだよ。だから、私と星七くんは付き合ってるんじゃない」

「……お前は杏樹じゃない!」

星七くんはそう言って、私を見おろす。

張り上げた声は攻撃的で、その視線は痛いほどに冷たかった。

「俺は手紙に杏樹って書いてあったから、ここに来たんだ。それなのに、待っていたのはお前でわけがわからなかった。聞こうとしたら、無理やり学校の中に連れ込まれて……もう、なんなんだよ」

星七くんの声が心に届いて、私は呼吸を

するのを忘れた。

ずきん、頭に強い痛みが走る。

あれ。なんだか心が引きさかれたように痛い。

放心状態の私のもとに、アリアさんが近づいてきた。

「クスクス。少し思い出してきた?」

私の顔をのぞきこむと、アリアさんは意味ありげな笑顔を浮かべる。

思い出す? 一体なにを……?

「前から怖かったんだよ。杏樹が髪を切ったら、次の日同じ髪型にしたり」

彼の話聞いているうちに、少しずつ記憶が蘇ってくる。

頭を抱えこむ私のことなんてお構いなしに、星七くんは続ける。

「筆箱とか、キーホルダーとか。全部杏樹と同じものに変えたりさ……正直気味悪かったんだよ」

そう言い終えると、顔をわかりやすくゆがませる。

——ずきつ。

彼の表情を見ると、また頭の奥が強く痛む。



「以心伝心ゲームだって、俺の好きな食べ物とか、家族構成とか知ってたり。俺たち、ほとんど話したことないじゃんか。なのに知つてるとか、怖すぎなんだよ!!」

突きさすような冷たい目で、私のことを見る。

「お前は俺の彼女でもないし。杏樹でもない。ただのクラスメイトの木下来夏だろ！」
木下来夏。

その名前を聞いた瞬間——息が止まった。そして、すべてを思い出したんだ。
ずっと消えなかった違和感の正体が、ようやくわかった。

「私の名前は……来夏」

星七くんの言う通り、私は……杏樹じゃない。

本当の私、木下来夏はクラスで目立つタイプじゃない。

誰かに話しかける勇気なんてなくて、いつも一人だった。

そう……憧れの星七くんに片思い中の、ただの地味で冴えない女の子だった。

星七くんの本物の彼女「杏樹」は、くりつとした大きな瞳がかわいらしい女の子。

明るくてクラスの中心にいて、よく笑う子だ。

そんな彼女のこと、うらやましくて……

憎かった。

私はいつの日からか、自分を星七くんの彼女「杏樹」だと思い込んでいたらしい。

すべてがつながると、私の思考は停止する。

「あはっ、あはははは！」

なんだか笑えてきた。

自分を見失って、他人だと思いこむなんて。私ってどうかしている。

「だから、悪いけど……このゲームに勝つには、ヒントがないと厳しいんだ。俺は来夏のこと、

何も知らないから……」

そして、星七くんはアリアさんのほうを振り向いた。

「アリアさん！ 頼む！ このゲームは俺たちには難しすぎる。少しヒントが欲しい」

「うーん。どうしようかなあ……クスクス」

アリアさんは目をつぶって考えるような顔をしたあと、私をじつと見つめる。

「ねえ、どうすればいいと思う？ 来夏ちゃん！」

口角をあげながら、私に質問をする。

どうすればって言われても……